

## 令和5年度 第1回 能楽入門講座 開催レポート

能楽初心者の方にも観能の夕べや定例能で上演される能や狂言を楽しく鑑賞していただけるよう、能楽に関する知識や魅力を広く学べる「能楽入門講座」を開催しています。

5月6日（土）に開催された第一回は、昨年好評だったシテ方・ワキ方対談「能楽師が語る！」シリーズの第2弾として、シテ方・狂言方両能楽師による対談を行いました。

能・狂言に関する基礎知識や、実際に舞台上で用いられる装束や小道具の紹介に加え、実演を交えたシテ方・狂言方の所作の違いなどについて解説していただいたほか、講師の指導のもと、受講者の皆さまにもお席で名乗りや簡単な所作の体験をしていただくなど、楽しくわかりやすい内容の充実した講座となりました。

本レポートでは、この講座の様子をダイジェストでお届けします。

### 令和5年度 能楽入門講座

#### 第一回「能楽師が語る！能と狂言の魅力」

日時：5月6日（土）13：30～15：00

講師：渡邊 茂人（シテ方宝生流能楽師）、能村 晶人（狂言方和泉流能楽師）

今回の講座は前半・後半の二部構成でした。前半は能・狂言の基礎知識に関するおはなしがメインで、後半は装束や小道具の紹介や実演を交えた所作の解説、そして講師の指導によるお席での体験を行いました。

まず前半の様子をお届けします。

#### それぞれの定義と歴史

講座を楽しんでいただくために、はじめに「能楽」「能」「狂言」の定義を確認しました。

能と狂言をあわせて「能楽」と呼びますが、能はシリアス、狂言は日常のコメディをそれぞれ題材にしており、趣が異なります。セットにされるのだから成立時期は同じだろうと思いきや、能は室町時代に観阿弥・世阿弥父子が大成したことが明確になっている一方、狂言は明確な成立時期はわからないそうです。狂言は能が大成されるよりも前からあったとの説もあるそうですよ。

## 能・狂言の曲について

能・狂言が歩んできた長い歴史の中で、様々な曲が生まれ、長年愛され続けた曲が現在も上演されています。曲の種類や、作者、制作時期について教えていただきました。

能の曲は「神・男・女・狂・鬼」という5つのジャンルに大別され、今日宝生流で上演される曲は180曲ほどあるとのこと。寺社縁起や軍記物語、歌物語などを典拠にしている作品が多く、そのほとんどが室町時代以前の出来事が題材になっているそうです。明治時代くらいまでは新作能が作られていたものの、今ではほとんど残っていないのだとか。現在も上演されている観阿弥や世阿弥が作った作品の完成度の高さが読み取れます。

狂言も登場人物の種類によって「太郎冠者狂言」「女狂言」「鬼狂言」などとジャンル分けされています。狂言は能の後に上演されますが、能で「翁」や神様の曲（脇能）を演じた際には、必ず「末広がり」や「福の神」といっためでたい要素を含んだ「脇狂言」を上演するという決まりごとがあるそうです。狂言もたくさんの作品が現在も上演されていますが、曲の作者や成立時期がわかっている曲が多い能とは違い、狂言は曲の作者や成立時期が定かでないものがほとんどとのこと。また、時代とともに台詞が変化していったと考えられており、たとえば、もとは「弓矢」であったのが、時代が下り「鉄砲」になったなど、人々の生活やそれを取り巻く環境を作品に反映させていたことがうかがえます。

## 台本ってあるの？



当日は参考資料として、宝生流の謡本と『狂言集成』（和泉流の狂言台本集）のコピーを冊子にして配布しました。写真は、資料をもとに謡本の説明をする渡邊茂人師（奥）。

このようにいずれも大変多くの曲がありますが、能には「謡<sup>うたい</sup>本<sup>ほん</sup>」と呼ばれる能の台本が存在します。狂言にも台本があることにはありますが、能の謡本のように製本したものが流通しているというわけではなく、各家（たとえば、野村万蔵家）が持っている台本をそこに属する能楽師が書き写して自分の台本を作っているそうです。研究用として『狂言集成』のような狂言の台本を集めた本が出版されていますが、家ごとに台本が異なるため、舞台上で聴く実際の台詞とは違ってきます。

また、能においては同じ演目であっても、共演するシテ方、ワキ方、狂言方でそれぞれ台本が異なるため、もちろん台詞も異なります。その場合は、それぞれの台本を照らし合わせて、流派によって台詞を変えることもあるそうです。

## 間狂言について

能では、<sup>あいきょうげん</sup>間狂言という形でシテ方と狂言方が共演することがあります。狂言方がシテやワキの諸役と共演する間狂言のことをアシライアイと言います。アシライアイの時には、シテ方は全力ではなく80%くらいの力で謡うそうです。本狂言で囃子のある曲の場合も同様に、囃子方は能の時のような全力の演奏はしません。能仕立ての狂言を上演する際、囃子方に演奏の仕方を能に近い形でお願いすると、対応してくれる人もいれば、決まりだからと断る人もいるようで、時代にあわせて上演スタイルも少しずつ変えていく必要があるのかもしれないね。

続いて後半の様子をお届けします。

## 面・装束・小道具の紹介

面と装束は能・狂言における役の扮装に欠かせません。実際に舞台上で使われる面や装束、小道具をご紹介します。

## 装束について

能装束からは<sup>からおり</sup>唐織と<sup>ぬいはく</sup>縫箔、狂言装束からは<sup>のしめ</sup>熨斗目と<sup>かたぎぬ</sup>肩衣をそれぞれご紹介いただきました。



「この色合いの縫箔は『羽衣』でよく用いられます」と渡邊師。

唐織は能装束の中でも最も華やかな装束の一つで、女性の役に用います。唐織のきらびやかな模様は刺繍に見えますが、唐織という名のとおりすべて織物なのだそうです。大陸から伝わってきた技術力の高さに驚かされます。唐織と同じく女性の役に用いられる縫箔は、<sup>しょうけん</sup>正絹に金・銀箔と刺繍が施された華やかな装束です。

唐織は表着（一番上に着る装束）ですが、縫箔は着附（表着の下に着る装束）として用いられるほか、<sup>こしまき</sup>腰巻といって下半身に巻き付ける着方もします。いずれも華やかな装束ですが、種類や着用の仕方によって見え方や雰囲気異なります、能装束の奥深さが感じられます。

熨斗目は狂言装束の中でも着附の類です。華やかな能装束とは違い、狂言装束は庶民的な柄で、この縞熨斗目は太郎冠者役が着用します。「庶民的な装束だから生地も木綿のような軽いもの」



将棋の駒が散りばめられた斬新なデザインの肩衣を紹介する能村晶人師。

というわけではなく、能装束と同じく正絹を用いた高価なものというから驚きです。対する肩衣は麻製で、斬新なデザインのものが多いのだそうです。ご紹介いただいた2着は将棋の駒と鬼瓦といった、日常生活の中にありそうなものを模様として取り入れており、能装束とは違った味わいのある装束です。他にはどのような模様があるのか、狂言を鑑賞する際に注目してみるのも良いかもしれません。「能は幽玄、狂言は日常のコメディ」と称されますが、装束にもそれが如実に表れていますね。

## 面について

能面からは節木増、般若、鬘を、狂言面からは乙、武悪、猿をご紹介いただきました。



鬘（左）と般若（右）を比較して紹介する渡邊師。

節木増は宝生流にとって大切な能面です。この能面は若く美しい女性を表した面で、鼻筋にある節が特徴です。お見せいただいた節木増は宝生宗家が所蔵する面の写しとのこと。宝生流では偶然できたこの節をただのしみととらえるのではなく、むしろこれが艶のある美しく気品のある女性を表すものとされた、とのお話もありました。次にご紹介いただいたのは般若。「般若を男だと思っている方が多いですが、女性なんですよ」と渡邊師。「女性が怒ると角が生える」という中世の女性像が色濃く反映された面なのです。同じ鬼繫がりでご紹介いただいた鬘という面は、男性の鬼を表現した面です。鬼などの人非ざるものの面は、目が金色に塗られていることが大きな特徴だということも教えていただきました。

能面の女性は顔立ちが整った美しい女性ですが、狂言面の女性は愛らしさが前面に出ています。乙の面を用いる時には、能と同じく鬘を結ってからかけるのだそうです。狂言の女性の役は乙をかけるばかりでなく、直面（面をかけず素顔で演じること）でビナン鬘と呼ばれる白い布を頭に巻いた姿の女性も登場します。能村師によれば「ビナン鬘の少し尖った部分は角を表しています」とのこと。能面・般若と同様、ビナン鬘をつけた狂言の女性は怒って角が出ている、まさに中世の女性像を表現した出で立ちだったのです。次にご紹介いただいたのは、狂言の鬼の面である武悪。能面の鬘は恐ろしい鬼の形相ですが、武悪は鬼であるにもかかわらず凄みを感じられません。「鬼なのに愛嬌があつて憎めない。これが狂言面の特徴です」と能村師。面からもコメディの要素が感じられます。最後にご紹介いただいたのは猿の面。登場人物に動物が出てくる狂言ならではの面です。



「同じ鬼なのに全然怖くない」と能村師。写真は、武悪の面を掲げる能村師（左）と鬘の面を掲げる渡邊師（右）。



女性や鬼など、同じものを表す面一つとっても、能面と狂言面との間でこれだけの明確な違いが出てくることに驚きです。

## 小道具について

能・狂言には欠かせない扇や、太刀や長刀<sup>ながなた</sup>といった長物などをご紹介します。

能では、折り畳んだ時に上端が中くらいに開いた「中啓<sup>ちゆうけい</sup>」という扇が用いられます。用いる役によって用いる扇の骨の色が異なります。亡霊の役は黒骨、現世に生きる人の役は白骨をしますが、女性役は生きているか否かにかかわらず黒骨を用いるという決まりがあるそうです。また、生きている男性の役では、男扇<sup>おとこおうぎ</sup>という白骨の中啓<sup>すおう</sup>を用いたり、素襖上下姿<sup>すおう</sup>（長袴着用）の時には鎮扇<sup>しづめおうぎ</sup>を用いたりします。仕舞などで使う鎮扇は、能では素襖上下を着用している時だけだそうです。役柄や曲によって扇の絵柄も決まっており、たとえば「清経<sup>きよつね</sup>」などの負修羅<sup>まげしゆら</sup>の曲では「波に入り日<sup>やしま</sup>」、「八島<sup>やしま</sup>」などの勝修羅<sup>かちしゆら</sup>の曲では「松に日の出」の絵柄の中啓を用います。狂言でも同様の決まり事があり、大名は金地、太郎冠者は鳥の子地など、役柄によって扇の図柄が決まっていますが、太郎冠者が用いる扇などは能の扇ほどの華やかさはないそうです。



太刀を紹介する渡邊師

次にご紹介いただいたのは、太刀と長刀。能や狂言で用いるこれらの長物<sup>ながもの たけみつ</sup>は竹光ですが、柄や鞘の部分は本物を使っているそうです。迫力があるのももっともです。講師のお二人から「柄や鞘は欲しいけれど、刀身は正直いらんです(笑)でも刀身に価値があって価格も高くなるから、新調するのは大変です」との本音も聞くことができました。本物に近いこのような長物を用いての所作は、実戦での動きと大差はないのだそうです。渡邊師は幼い頃、加賀獅子を習っていたそうで、その動きと能での長刀の所作はほと

んど同じであると教えていただきました。武術の稽古を表立ってできなかった昔、加賀獅子のような芸能という形に落とし込んでいた名残とも考えられているのだとか。また、狂言でも長物を扱うことがあり、基本の型は能と同じですが、能らしくならないように注意しているそうです。狂言方が長物を扱う時にはシテ方に所作を教えてもらうようで、能と狂言の意外な関係性も知ることができました。

最後にご紹介いただいたのは、鬘桶<sup>かづらおけ</sup>。能では腰かけとして用いられていますが、狂言では物を入れる容器になったり盃になったり、ある時には柿木になったりと、様々な姿に変身します。狂言で用い



鬘桶を紹介する能村師

られる鬘桶の最大の特徴は、脚が付いていないこと。能で用いられる鬘桶には脚が三つ付いていますが、狂言では鬘桶の上に乗ることがあるため、安定性を高めるために下は真っ平なのだそうです。また、能の鬘桶は無地ですが、狂言のものには側面に図柄が描かれているものもあり、同じ鬘桶でも違いがあることがわかりました。

## お席で体験！～所作と名乗り～



能の泣く所作を体験する受講者

能・狂言の所作には型があり、それぞれ名前が付けられています。同じ名前の型でも動きが全く異なります。また、能の中でも特に宝生流は「腹で舞う」といわれるほどに動きがコンパクトなのに対し、狂言は動きが全体的に大きいなどの違いがあります。受講者の皆さまにはそれぞれの泣く所作、狂言の笑う所作を体験していただきました。能は静かに零れ落ちる涙を受け止め、狂言では目元まで大きく手を動かし泣き声の台詞も付けるといった、能に比べやや誇張された泣き方で、同じ泣くという所作でも明確な違いがあることがよくわかりました。また、能からは「橋弁慶<sup>はしべんけい</sup>」、狂言からは「附子<sup>ぶす</sup>」の冒頭の名乗りも体験していただきました。能は「ハッキリ」謡う箇所でも狂言に比べ調子が落ち着いており、狂言は能に比べ調子が少し高いなどの違いがありました。「声の高さは演者の声質によって多少の誤差はある」としながらも、狂言の喜劇という性格上、低く暗い声では謡わない、とも教えていただきました。

実際に所作や謡の体験をしていただいたことで、能と狂言の違いがはっきりとわかったのではないのでしょうか。また、型を一つ知っていれば、実際に能や狂言を鑑賞する際にわかる場面が増え、より能・狂言の面白さを発見できるようになると思います。

## 講師による「道成寺」間狂言箇所の謡実演

講師らによる「道成寺<sup>どうじょうじ</sup>」の間狂言箇所の謡を実演していただきました。受講者の皆さまには、当日配布資料に掲載した宝生流「道成寺」謡本と『狂言集成』の「道成寺」の台詞を見比べながらお聴きいただきました。『狂言集成』は前述のとおり、和泉流の台本集ではありませんがあくまでも研究用の書籍なので、実際の台詞とは異なります。『狂言集成』に掲載されているものは対上掛<sup>かみかかり</sup>の台詞ですが、観世流を想定したものだそうで、宝生流の時には特に異なる箇所が多いそうです。また、「アシライアイの時には、シテ方は全力では謡わない」とのお話がありましたが、「道成寺」はシテ方にとっても狂言方にとっても重要な曲なので、シテ方も力をセーブせずに謡います。受講者の皆さまは迫力のある謡に聞き入っていました。

## 質疑応答

最後に受講者の皆さまからお寄せいただいた質問に講師のお二人にお答えいただきました。

### Q1 能楽初心者が能や狂言を楽しむためにはどうすればいいですか？

A. (渡邊師) 演目があらかじめわかっている場合は、ネットであらすじを調べてから観るといいと思います。あらすじが頭に入っていた方が内容がわかって楽しめます。また、番組を見て人数が多い演目は大体観ていて面白いです。能は基本的に省略する芸能なので、シテ1人ワキ1人という演目が多いですが、それは上級者向きかな、と思います。大勢出ている演目の方が、それぞれの役がいろんなことをするので、ストーリーも追いやすいです。鬼が出てくる曲も大体面白いです。また、「観能の夕べ」は手軽に能一番、狂言一番を観ることができるので、そういった公演を選んでも良いと思います。

(能村師) 最初はわからなくても良いです。私自身もわからない曲がたくさんあります。ただ、わからないからといっても、ストーリー全体がわからなくても、とりあえずあらすじがなんとなくわかっていれば良いし、シテの装束が綺麗だなとか、演者の足捌きが気持ちいいとか、いろんな着眼点があるから、いろんな見方をして楽しんでいくうちに、少しずつ興味を持っていただいて、そこから演者がどんなことをやっているのかなど、理解を深めていただければいいと思います。

### Q2 装束はクリーニングできますか？新しく装束を作る際の費用はどうしていますか？

A. (渡邊師) 装束は洗えません。家元が所蔵する装束の中には、室町時代や江戸時代から伝わる貴重なものが残っています。このような先人たちの汗が染み込んだものを身にまとうことで、私たちも身が入る思いがします。唐織は大変高価なもので、昔のものは特に質が良く、今同じものを作ろうとすると値段が付かなくなってしまいますが、なるべくそれに近いものを作ろうと装束屋も努力しています。唐織を今新調しようとするすると200万円ほどになります。ただし、これでも能楽師割引がきいていて、互いに支え合う関係であるので、値段は装束屋と能楽師が相談しながら決めることが多いです。

(能村師) 面にしても装束にしても、使っていないと逆に傷むし、長持ちしません。特に面は息をかけていないと、塗装などがひび割れることもあります。

### Q3 アシライアイの演目にはどのような曲がありますか？

A. 「黒塚」「道成寺」「鉄輪」など恨みを持った女性が出てくる曲、現在物（幽霊ではなく登場人物が生きた人間の曲）で「安宅」や、「放下僧」「望月」のような仇討物などがあります。普通の間狂言は、前半が終わってシテが中入りした後、ワキと会話をする事が多く、その間にシテが装束をかえます。アシライ物の時は、シテ方やワキ方がやらないような事を狂言方がやるといったようなものが多いです。

### Q4 加賀藩以外に同様に能に力を入れた藩はありますか？

A. あります。宝生流でいうと、会津藩（会津宝生）などです。

### Q5 金沢出身の能楽師はたくさんいますね。狂言でも野村万蔵家は先祖を辿ると加賀との繋がりがあると聞いたことがあるのですが…

A.（能村師）野村万蔵家はもともと金沢の出で、3世まで金沢、4世からは東京に出て、現在も東京を中心に活動しています。今の万蔵は9世です。

### Q6 忘れられない舞台はありますか？

A.（渡邊師）宝生流には現在180曲ほどありますが、その中でも「扱キ物」というものがあり、能楽師が若いうちに経験する登竜門のような演目があります。「石橋」「道成寺」「乱」（「猩々」の小書き（特別演出）つきのもの）の順番に経験します。最初にやった「石橋」をはじめ経験した時は嬉しかったし、今までにないくらい一生懸命に稽古した思い出があります。先輩方も必ず通ってきている道なので、その時の先輩方の目が非常に厳しいというか…「自分の時にはこうだった」というのをいろんな人からたくさん聞かされたことも思い出の一つになっています。

（能村師）忘れられない舞台は数々あります。間狂言は大変難しく、一曲の物語をずっと謡わなければならない、短いものもあれば長いものもあって、居語と言って座って語るものや立ったまま5分以上ずっと喋るものなどさまざまあります。そんな間狂言の台詞を絶句してしまったり…「春日龍神」の間狂言だったのですが、今でも「春日龍神」が出ると思い出してしまいます。自らの恥と戒めの意味で忘れられない舞台です。

<補足>間狂言を知っているシテ方はほとんどいません。間狂言で止まった場合、本来なら偉い先生が助けに入るべきですが、放置プレイが多いそう。渡邊師は過去に間狂言が止まってしまった舞台で、橋掛りの方から「どこで止まった？」と上の先生が助け舟を出している



場面に遭遇したこともあるそうです。

## さいごに

普段は能楽師のお話を聞くことがなかなかできないですが、今回シテ方・狂言方両能楽師による対談を開催し、受講者の皆さまには1時間半たっぷりとお楽しみいただけたのではないかと思います。お話だけでなく、面や装束など実物やそれを用いた所作の実演紹介、謡の実演に加え、今回は実際に受講者の皆さまにも簡単ではありますが体験をしていただいたことで、解説と体験の両面から、より能楽に対する理解が深まったのではないのでしょうか。今後の能楽鑑賞にお役立ていただければ幸いです。

(編集：当日司会進行係 伊藤瑛子)